出会い　ふれあい　助け合い

KSKP サロン・あべの NO.53

一九九〇年十一月二二日発行（毎日発行）KSKP通巻一四五三号一九八四年八月二〇日第三種郵便認可
発行人＝関西障害者定期刊行物協会　大阪市東成区中本一－三－六　ベルビュウ森の宮二〇七号

＜サロン・あべの＞１０月の出会い、

盲導犬「ケリア号」の思い出

金木犀の香りがどこからともなく漂っていた平成二年十月二〇日（土）午後一時～四時、育徳コミュニティーセンター研修室に於て、パネラーに大島功氏をお迎えして愛犬ケリア号の思い出を語っていただいた。

□　□

銀行勤務をされていた大島氏は、昭和五十年頃に白内症で失明。その後、東京の盲導犬訓練所で一ヶ月合宿生活をして三日目から相性のよい盲導犬と一緒に訓練に入る。

昔は、シェパード犬が盲導犬として使われていたが、十四、五年前よりラプラドルードリバー種が適しているとして活用されてきた。そのたれ耳、短足、三角顔の盲導犬ケリア号（雄）と出会い、共に大阪の地を踏んだのが、昭和五三年七月三〇日。

そして、今年の同じ七月三〇日、くしくもケリア号の命日となった。

生きる活力を与えてくれたケリア号との生活は、十二年間であった。今、我が国には、五二〇頭ほどの盲導犬がいるが、ケリア号ほど行動範囲が広く、多くの人々と出会い様々な経験をした盲導犬は、いないと思われる。自分が入院中のことで最後を看とってやれなかったことが心残りだけれど、その点で彼は、満足して旅立ってくれたのではないかと思っている。

大阪に来たケリア号は、気短かで、きかん坊で、それでいて甘えたで、よく婦人のスカートに鼻先を入れてめくるので「スカートめくりのケリア」とあだなが付けられ、主人によく似てはると言われた。

昭和五五年に一念発起をして全国縦断の旅を計画、ケリア号と野次喜多道中を始めた。この時、各地のテレビ放送局で〃盲導犬と歩いた東海道・盲導犬の社会参加〃等として紹介された。

東海道をケリア号と一緒に歩いたのは、

ケリア号を語る大島　功氏

まず外に出て歩きたいと思ったことと、盲導犬の理解と街作りを自分の体験を通して多くの人達に知って欲しいと考えたから。

知らない土地に行き、一夜の宿を捜す時は、盲導犬を連れていると断られる。一、二件断られると不安になってくる。三、四件目にやっと見つかりホッとする。宿捜しがいちばんの苦労。ホテルや旅館等より、民宿の方が犬に理解がある。また、盲導犬を知らない人でも道中一緒にたとえ二〇〇メートルでも歩いてもらえれば、かならず理解を示してくれた。近頃でも、思いついて一人旅に出てもなかなか泊めてくれる旅館はない。そこで、一計を案じて行く先々に、その地域の市や区に電話を入れて「盲導犬を連れて行くので、泊まれる所を紹介して欲しい」とお願いする。とたいがい当惑される。後で再度連絡を入れたりして行くが、相手側は、不安がる。

だから、ぶっつけ本番で行き、頼むのが一番よいように思えるが、役所関係の人達にも盲導犬連れの人がいることを知って欲しいので、あちこちへ連絡を入れている。

泊まる所によって盲導犬にも一人前の料金を請求されるたりする。その時は「犬用のゆかた有りますか、バスを利用してもいいのですか」と聞いてみる。

交通機関にしても、盲導犬が横にいるだけで、キャキャーと騒ぐ人がいる。盲導犬は、盲人のよき伴侶として一つの人権を与えられていると考えているが、一般人の中には、そこまで理解を持っていない人がいるのが現状。しかし、岐阜県の盲導犬「サーブ」の問題など含めて法律的には、もう一つの人格として存在価値は認められているのは知られているところ。

盲導犬は、訓練がしっかりとゆきとどいており、人に危害を加えたり、他の犬に向って行ったり、主人に反抗したりはしない。

ケリア号も立派に訓練を受けており、他人から食べ物を貰って食べてはいけない事をわきまえていたが、慣れた人にそっと食べ物を貰う時があると、頭を動かさず（頭を動かすと食べる事がハーネスを通じて主人の手に伝わり、怒られるから）前足を伸ばして手元によせて、解らなように食べてしまう要領のよさがあった。他人に対して愛敬よく、どこへ行っても可愛がられていた。

□　□

盲導犬を連れて手引の人と歩いている人がたまにいるが、これはナンセンス。

盲導犬と歩くより、手引の人と歩く方が楽は楽。盲導犬は、安全を確かめて誘導してくれるが、行き先の地図を知って連れてくれるわけではないから。しかし、自分の都合のよい時間に行きたい所へ行ける楽しみがある。自分の時間を持てるということは、それだけ自由があると言える。

一人暮らしには必要な伴侶として希望者には、全て盲導犬を当るようにして欲しいと考えているが、日本の現状ではなかなかそこまでいっていない。六ヶ所に盲導犬の訓練所があるが、二〇数頭～二、三頭が育てられているだけで、職員の給与も安い。ところがアメリカでは、五～六〇〇〇頭が七～八万坪の原野で育てられ、その中では山や川、町があり、一貫した訓練がされていると言う。日本でも一ヶ所で育てて欲しいものである。

障害者の生活も日々楽になってきているが、福祉国家と言われる程の社会にはまだなっていない。とりわけ視力障害者には、

社会的に受け入れられにくい。今も盲学校では、ハリ・キュウ・マッサージを職業に勧められているようだが、もっと自由に選択できる社会の受け入れ態勢が欲しいと希う。若い人に今後の努力を望み、配偶者、職業選択の自由、家族に障害者がいるからという負目等の心配は、無用と声を大にして言いたい。

ケリア号が亡くなり、寂しくなり、不自由にもなったが、二世をもらう気持ちはない。盲導犬と歩くには、体力がある程度いるのと、別れに会うのが辛いから…。

ケリア号の大きな遺影を中央に置き、ビデオ映像では、大島氏と共に東海道を歩くケリア号の姿を見せていただきながらお話を伺った。ビデオ操作＝植松氏、司会＝加賀谷氏、参加者三三名。

初めての介護

加賀谷　正

私が、初めて障害者と接したのは、二二才の夏でした。その頃、朝日新聞で障害者自立集会のお手伝いさんを募集していて、私も休日は暇だったので、一度位良いことをしておこうと思って応募しました。

自立集会は、九月頃のため、それの打ち合わせという事で、七月頃に芦原橋の総合福祉センターに集ることになりました。

当日行ってみると、障害者の人がたくさん来ていました。よく覚えていませんが、障害者…五人、健常者…三人位でした。私は、お手伝いの人の打ち合わせだから、障害者が来るとは思ってもみませんでした。お手伝いは健常者の三人で、残りの人はスタッフでした。今まで障害者とはほとんど接したことがありませんでしたが、別に特別視してなかったので、不安ではありませんでした。ただ自己紹介の時、言語障害の人が何を言っているのかまったく分かりませんでした。でも、スタッフの人達は分かっていたので、自分に分からないのに、なぜあの人達は分かるのか、いと不思議でした。この言語障害のひどい人は自立していて、私がこの人の泊り介護に入るようになったきっかけは、この自立集会でした。

現在でも泊り介護に月に一度入っていまして、もう四年程になります。不思議なもので、初めての日は、何を言っているのか全く分からなかったのに、二、三度会うちに聴き取れるようになりました。

打ち合わせが終わって帰るとき、昼ご飯を食べて帰ろうということになって、私と障害者の人三人で中華料理屋に入りました。

自分で食べれない人が一人いて、その人に「食事介護は、初めてですか」と聴かれたので、そんなに難しいのかなと不安でしたが、実際介護してみると少しも難しくありませんでした。（上手に介護しなかったからかなぁ）

私が幅広く外出介護するようになったのは、この食事介護をした人に介護者として登録するように勧められたからです。私が障害者の介護をするようになったきっかけは、すべて、自立集会にあります。

現在は、泊り介護を月に一度で、外出介護を二ヵ月に一度くらいしています。当分は、このペースで続けようと考えています。

あいか彩子先生のファッションショーに出演して

山本 篤江

十月二二日、大阪城公園のすぐそばにあるMIDシアターで、身体障害者向けの「あいか彩子・チャリティーファッションショー　これから・・・」が華々しく開かれました。車椅子使用の障害者十三人と、プロのモデルさん十二人による競演で舞台に出ました。

サロンからも、冨田さんはじめ沢山の方々に来ていただきまして、嬉しいやら恥ずかしいやらで訳が分からずそのまま、本番が始まりました。本当のことをばらしますと、ほとんど練習らしきものはなかったのです。そのわりには失敗がなかったでしょう。へへへ～

当日の楽屋裏はもうたいへん、朝の八時から釘付け。一歩中に入ると「はい、着替え、メーク、ヘヤーセット、次の衣装に着替えて」と。昼御飯の時間もこのとうり。結局その日は昼抜きで、夜の六時ごろまで一日中、合計三回このちょうし。最後になると疲れ果ててしまい、しゃべるのもうるさくなるほどでしたけれど、自分が別人になった気分で、とっても楽しかったです。

それから、この日会社を休んでまで、一日ずーとお世話して下さった河合さん、本当にありがとうございました。

新しい生活のデザイン

ファッション・ショー　これから・・・

去る10月22日、3月のサロンの出会いにも来てくださった、あいか彩子さんのデザインによる、障害をもつ人のための工夫がいっぱいのファッション・ショーが開催されました。

美智子のこんな話

車いすのファッションショーを見て

岸田 美智子

先日、あいか彩子先生のファッションショーを見にいかせていただきました。

ファッションショーなんて、生れて初めて見に行きました。

幻想的な音楽が流れ、すてきで個性的な車いすが五台並べられて始まりました。

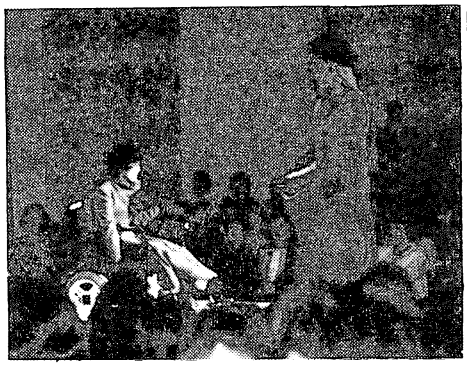
まず最初は、すがすがしい朝の雰囲気、ピンク色のパジャマやネグリジェーで始まりました。その後、色々なステージが繰り広げられました。フォーマルドレスやワンピースなど、健常者と車いす障害者のモデルの方が、まったく同じデザインの衣装を着ておられました。ただ違うのは、障害者の方は、ファスナーやマジックテープなど使ったりして、着易くしているのでした。

そして、雨の日の装いにかかせないレインコートの数々もあ

りました。雨の日は、健常者でも出掛けるのがおっくうになりますが、車いす障害者は、まだまだ出かけることをあきらめたりしていましたので、こんな楽しいレインコートがあれば、本当にいいなぁーと思いました。最後のステージは、ディスコダンスのステージになりましたが、皆楽しそうに踊っていて、車いすが違和感なくとけあっていました。

ただ一つだけ気になった事は、車いすの観客席が決っていて、後ろだった事です。なぜ、もっと工夫が出来なかったのかと思います。車いすの障害者には、障害の為見えにくい人もけっこう多いのです。

皆見えたのかどうか、とても気になる一日でした。



ありがとう。

4度目の＊優良賞＊受賞

＜サロン・あべの＞紙が、大阪府社会福祉協議会主催の第一八回福祉広報紙コンクールの「優良賞」を、十月二五日（木）森の宮青少年会館に於て受賞しました。四度目の「優良賞」です。

毎年参加紙が増えて今年は、八五紙が審査基準にもとずいて個別審査がおこなわれて、その評価点を合計し順位が出されるとのことです。入賞評には、「全体に読者からの寄稿、それも暮らしのレベルで目に止ったことや体験を通しての記事は、気楽に読め共感を生む」とあります。

＜サロン・あべの＞に参加くださる人、読んで下さる方、原稿を書いて下さる皆様方のご協力のおかげと、感謝しております。

ありがとうございました。

今後とも、皆様の声を聞かせていただいて、皆様と共に＜サロン・あべの＞紙を充実させていきたいと思いますので、宜しくお願い申し上げます。

「つながり」のために

岡　知史

以前ボランティア・ビューローの職員をしていたとき、相談を受けた人から何やかやと贈り物をもらって困ったことがある。

大きなケーキや、高価な紅茶のパックなど、どうやって断ればいいのか、ひとつの難題でさえあった。

職員の立場でこうだったのから、ましてボランティアさんの方は、そういうプレゼントを断わるのが大変だったようだ。手紙を手渡されたと思って開いてみると、お金が入っていたりする。突然、何かを宅急便で受けとってしまうこともある。

そんなときは、ぼくは、ボランティアの「意味」を、相談者の人たちに説明していた。わかってもらえない人には、「ボランティアは、そういうものは受け取らないものなんです」と、なにか規則でもあるかのように話した記憶がある。

それで、ぼくは、ボランティアの意味がわかっていない人が多いねと、苦笑して誰かれとなく話したものである。ボランティア活動に対する理解の不足が、贈り物を贈る行動につながると考えていたのだ。

しかし、と、いまは思うのだが、はたして、それだけだったのか。

一年前、中国人であるぼくの家内は、天安門事件に続く政変のために中国から日本に来ることができなくなっていた。そのとき、ぼくはいろいろな人の援助を受けた。そして、いろいろな人の援助を受けようとしたのである。

そんなとき、忙しいなかをわざわざ時間をさいて助けてくれた人に、なにか贈りたいと本気で思ったものである。もちろん、助けてくれた人はまったくの好意でしてくれている。しかし好意だからこそ、これからも続けて助けてくれるのかどうか、こちらはわからないのである。

なんとかしてこれからも助けてほしい、そちらの都合が悪くなっても無理をしてでも続けて助けてもらいたい、と願うとき、何かを贈るということを考えてしまう。

そして、受けとってもらえないとき、これで見捨てられるのか、これで終りなのかと、不安になる。

ボランティア活動をしていて、たくさんのお金を贈られ困惑することは、ボランティアの経験が多少ある人にとっては、ありふれたことであろう。ぼく自身、「こんなつもりで訪問しているわけではないのに」と、やや失望したこともあったが、考えてみれば、自分も困っていたときには同じようにお金を贈ろうとしたのだった。

「もの」は金があればいつでも買える。そして「金」は働けば手にはいる。しかし「つながり」は金では買えない。だからこそ、矛盾するようだが、お金を多少使ってでも「つながり」を保っていたいと思う。きっと、そういう心理なのだ、困っている立場の人間というものは。

ボランティア活動をしていて、高価なものを贈られて「幻滅した」などと言う人がいるが、自分が金で動く人間だと思われたと憤慨しているのだろうか。だとしたら、それこそ無情な「解釈」ではないか。

金を受け取れというのではない。金や贈り物を贈ってでも、その「つながり」を保ちたいという、せっぱつまった人間の状況を思いうかべてほしいと思う。手段を選ばない、いや、手段についてあれこれと考える余裕すらもないままに、「つながり」をもとめるのが困窮した人の姿なのだ。

ナンペイの

「ひとこと&ふたこと ③

一年B組からの手紙

ある日、郵便受けを覗いてみると厚さが一センチほどもある手作りらしい封筒が、いかにも重そうに入っていた。

「なんやろ、これ？取りにくいのに！」

ブツブツ一人ぼやきながら、わが家の小さな郵便受けからその得体の知れない郵便物を取り出した。

表書きは「南光龍平　仁子様」である。見覚えのない文字だったが、何となくピンッとくるものがあった。急いで裏返して差出し人を確かめる。

「広島福祉専門学校社会福祉科　一年B組」

やっと来たな、と思いながら封を開ける。バラバラッという感じで中身が広がった。写真が一枚と、あとは思い思いの紙に書かれた手紙。

「また広島に来てください。今度はもっとゆっくり案内しますから」

「写真どうもありがとう。天気が悪くて残念だったけど楽しかった」等々、文面もじつにバラエティーに富んでいて読んでいる私の顔も知らず知らずのうちにほころぶ。封筒には十人分の手紙が入っていた。

この手紙が届く一ヵ月少し前、私は妻とふたり広島で開かれた「ピアカウンセリング講座」に参加した。その時、ボランティアとして私たちを介助してくれていたのが、この手紙の差出人の「広島福祉専門学校福祉科の若者たち。

最初から、せっかく広島へ行くのだから講座の終わったあとは、平和公園や原爆ドームへも立ちより「安芸の宮島」にも、と考えていたのだが「宮島」へはふたりだけで行くのはどうも無理ということで、半分はあきらめていた。だが、運良く他にも「宮島」へ行たいという人も何人かいたために、それならという訳で以外と話はスムーズにまとまった。無論それにもまして、心やさしき若者たちに出会えたお陰で希望は充分かなえられ、私たちは「安芸の宮島」を楽しむことが出来た。

大阪へ帰るとすぐに、その時写した写真を人数分焼増しして広島の学校あてお礼の手紙と一緒に送った。ところが、ひと月近くたっても「写真が着いた」という葉書一枚届かない。

「別にかめへんか、そんなにたいしたことやないし、あの時だけのことやったんやな」

なんとなく淋しい気持ちもあったけれど、いつの間にかそのことも忘れ掛けていた、そういう時に舞い込んで来たのが先に書いた「1センチほどの郵便」である。

「試験の時期だったので、返事が遅くなってすみません」ということも、ちゃんと書いてあった。

十人分の、それぞれに個性ある文章、文字、そしてイラスト。それらを全部読み終え、見終わった時、まるで自分が学校の先生にでもなったような不思議な気持ちになっていた。そして、あらためて思った。

「人と人との出会いって、とってもええもんやなぁ。」と・・・。

南光龍平

おしらせ

十二月の出会い

日時　平成二年十二月一日（土）
　午後一時～四時
場所　育徳コミュニティーセンター研修室
　（車イストイレ・スロープ有）
内容　「とってもハッピーなクリスマス」
会費　一二〇〇円（とってもハッピーなプレゼントがあります）
申し込みと問合わせ
　十一月二六日（月）までに
　TEL・〇六－六九一－一〇二八冨田迄

＃感謝します＃

カンパ・アルバムセット・冊子・お茶菓子、招待券等、
ご協力ありがとうございました。
お礼を申し上げます。
　十月のカンパ　金一〇四〇〇円
今西美奈子、植松菊雄、大島　功、
金子花江、キ・ラ・ラ、土屋由美子、
〃灯〃、匿名二名様、　（敬称略）

ふれあい交流会

平成二年十月二六日（金）午後一時三〇分より、長居公園内にある身体障害者スポーツセンター体育館に於て、あべのボランティア・ビューローと区社協主催のボランティアスクールの受講生と障害者との交流会がありました。参加者全員を六～八人の六グループに分けて、グループ員間で、ローンボールやシャトルプレー、盲人卓球をしました。障害者向けのスポーツゲームを健常者のボランティア方と肢体障害者、視力障害者、たんぽぽ作業所の仲間たちが加わって和気合いあいに楽しみました。
　サロンからは、十二名が参加しました。

∞サロン・あべの紙の朗読テープが出来ました∞

「阿倍野区ボランティア連絡協議会」の朗読グループのご協力により、サロン・あべの紙の録音テープを作っていただいています。バックナンバーは三九号から、五二号の分があります。五〇号は記念号で頁数がおおく、九〇分と六〇分の二巻に収録されています。サロン紙朗読テープご希望の方は、冨田までお申し出下さい。
（TEL06-691-1028）

編集後記

先日、ほんとうに久しぶりに山に登ったらひざをいためてしまいました。もう痛くて痛くて曲がらないんです。電車で帰ってきたんですが何と階段の多いことかと、あらためて痛感しました。でも、二日もたつとすっかり忘れてしまって・・・。いけませんね。
　今月は字ばかりですみません。来月は（石）さん復活です。
（は）

編集人＜サロン・あべの＞第53号
編集：サロン・あべの　運営委員会　定価 100円
（大阪市阿倍野区阪南町6－3－26．
電話06－691－1028冨田慶子）

一九九〇年十一月二二日発行（毎日発行）KSKP通巻一四五三号一九八四年八月二〇日第三種郵便認可
発行人＝関西障害者定期刊行物協会　大阪市東成区中本一－三－六　ベルビュウ森の宮二〇七号